

■知的障害のある子どもたちへの実践事例

特別支援学校中学部1年「国語・数学」での活用例

東京都立水元特別支援学校
主任教諭 津留 博行

はじめに

知的障害の特別支援学校である本校で、マルチメディアDAISY図書が導入されて数年になりますが、これまでは概ね小学部での活用が中心でした。そこで今年度は、活用範囲をさらに広げることがねらいとして、中学部での活用を試みました。

「わいわい文庫」の収蔵作品数の多さとジャンルの豊富さは、小学部児童に限らず中学生までの幅広い年齢（発達年齢）層を対象にでき、また個別学習、教科授業、休み時間など、さまざまな場面での活用が可能なのではないかと感じています。今年度については、教科「国語・数学」のグループ授業での、主としてマルチメディアDAISY図書の機能面に焦点をあてた活用例についてご報告します。

授業グループの実態

自閉症の生徒を含めて、知的障害のある生徒8名のグループです。ひらがなの読み書きがむずかしい生徒から、短い物語であればあらすじを理解する

ことのできる生徒まで、幅広い生徒がいます。集中力の続く生徒もいればすぐにあきてしまう生徒もいて、單元ごとに教材の作製や選定に配慮が必要です。そうした実態からも、豊富な収蔵作品の中から教材を選択できるのは、「わいわい文庫」の大きな利点であると思います。

実践例

教科「国語・数学」の授業の、「読み聞かせ・音読」の単元でマルチメディアDAISY図書を活用しました。初めに絵本の読み聞かせを行い、ストーリーを追いながら絵本を見る活動を行ってから、最後に自分で声を出して読む活動に移行しました。

読み聞かせでは、生徒が集中できる時間を考慮すると、あまり長い話は教材としてふさわしくありません。教材の選択で苦慮する部分ですが、そこで役に立ったのが、ジャンルや対象年齢、再生時間といった項目が整理されている目録「Area Map」でした。この目録をもとにして、生徒の生活年齢や集

中力を考慮したうえで、教材として『バスにのって』を選択しました。また「見る」ことの支援として、大型のTVモニターに投影する形で授業を行いました。

(1) 読み聞かせ

読み聞かせの場面では、絵本の絵と文字の大きさの配分は大切な要素だと思います。その配分を自由に変えられるところも、今回とても役立つ機能でした。ストーリーを追うことをねらいとした前半では、文字を小さめに表示し絵を強調して読み聞かせを行い、回数を重ねたのち、生徒の音読につなげる段階では文字を大きく表示し、生徒が文字を意識しながら読み聞かせを聞けるよう配慮しました。

また、教員による読み聞かせだけでなく、読み上げ機能を使うことで、生徒の興味・関心を喚起することができ、その抑揚のつけ方や強調の仕方などは、教員にとっても参考になるものだと思います。

また、読み上げ速度や読み上げ間隔、読みの切り換えなどの機能を、読み聞かせの進みに合わせて設定することで、一層生徒が聞きやすく、同時に一層学習のねらいを反映した読み聞かせを行うことができるのではないかと思います。

(2) 音読

音読の場面では、フレーズ移動やハイライト機能を活用できました。読みのリズムを強調したい部分を繰り返し読ませたいときは、フレーズ移動でスムーズに繰り返すことができます。またひらがなを学習中の生徒は、教員の音読に続けて模倣して読むようにしましたが、ハイライト機能を手がかりに自分がどの部分を読んでいるのかに気づくことができました。

こうした機能を使うことで、ひらがなが読めない生徒も耳で聞いた声を模倣して読むだけではなく、同時にその時に読んでいる文字（文節）を確認することができていました。これはただ繰り返すだけの音読と比較して、大きな違いではないかと思います。

おわりに

今回は、8名の学習グループによる一斉授業での活用例を紹介しました。授業では、できるだけ絵本を読むことの楽しさが感じられるように、題材選び、提示の仕方、聞かせ方、読ませ方といった点に配慮して授業を進めました。そういった配慮をするうえで、マルチメディアDAISY図書の機能はとても役立つと思います。

読書の習慣を身につけるという面では、上記のような一斉授業だけではなく、日々の読書体験、日常的に本に触

れるという体験がより重要だと思います。与えられた教材ではなく、自分が選んだ読みたい本を読むということも大切な要素だと思います。そういった視点からは、1人1台端末などで各個に配布して、休み時間や家庭で自由に読書をするという使い方が、より適切であるように感じます。

そのような場合には、「わいわい文庫」の収蔵量の多さはマイナスの要素にもなりますので、ある程度数をしぼった形で配布する必要があるでしょ

う。生徒の気持ちが読書に向かうような動機づけの工夫も、通常読書指導同様に必要であることは言うまでもありません。

しかし、常に身近に本がある、それも書架いっぱいの本が手のひらにコンパクトにのっているという点は、それだけで大きな利点であると言えるでしょう。今後もその利点を生かした読書指導を、さらに進めていければと考えています。

